

学輪IIDA共通カリキュラム 構築プロジェクトの取組

平岡和久(立命館大学)

共通カリキュラム構築プロジェクトの目的 とモデルプログラムづくりの位置づけ

◆目的

飯田の価値の発見・共有化

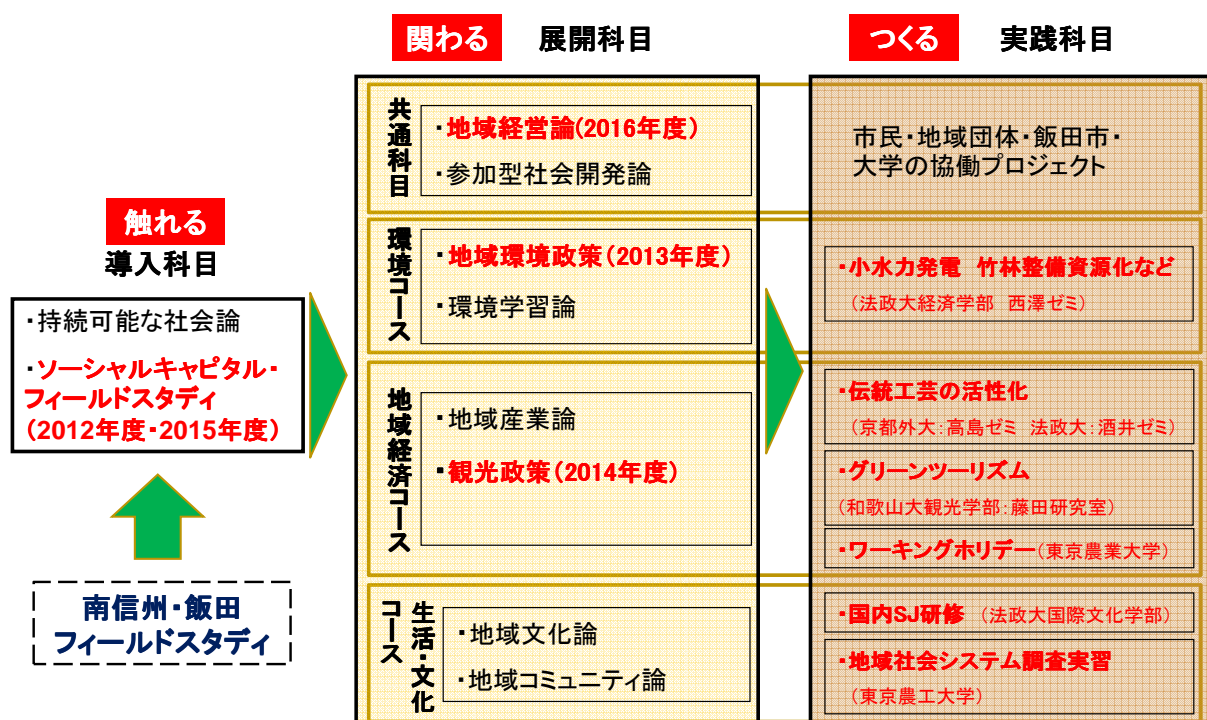
- 飯田における研究や教育のコアを確認して体系化・「見える化」する
- 新たな域学連携、大学間連携を通じて、地域と大学が共に学び合う場づくりへ

◆モデルプログラムづくりの位置づけ

飯田の価値を体系化・「見える化」するための方法の一つとしての「共通カリキュラム」

そのコアとしての導入科目と展開科目の実証実験

共通カリキュラムのイメージ



これまでのモデルプログラムづくりの実践

○ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ2012

立命館大学、名城大学、和歌山大学 参加者数:学生25名、教員4名 合計29名

○地域環境政策フィールドスタディ2013

立命館大学、名城大学、立命館アジア太平洋大学 参加者数:学生25名、教員3名 合計28名

○ニューツーリズム・フィールドスタディ2014

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学 参加者数:学生31名、教員6名 合計37名

○ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ2015

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学 参加者数:学生36名、教員5名 合計41名

○地域経営論フィールドスタディ2016

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学、立命館アジア太平洋大学

参加者数:学生44名、教員6名 合計50名

2016年度のテーマについて

テーマ:「**地域経営論** — **人材サイクルを検証する** — 」

・飯田市の地域経営における人材サイクルの柱である、「帰ってきたいと考える人づくり」、「住み続けたいと考える地域づくり」、「帰ってこられる産業づくり」の3つの取組みを総合的に把握する

・飯田市の地域経営の成果と課題、持続可能な地域の実現に向けた地域経営のあり方を様々な角度から考え、理解を深める

プログラムの組み立てと特徴

・飯田市の地域経営の3つの領域を総合的に把握するために、講義とフィールドワークを組み合わせる

・飯田市の地域経営は重層的に行われており、各層においてマネジメントを担う人材が存在

→ 行政のトップマネジメント(市長)、ミドルマネジメント(部長クラス)から、行政や地域の実行組織レベルのマネジメントまで、それぞれのマネジメント人材から話を聞く

・それぞれの方々が、失敗を含め試行錯誤してきた実際の現場の苦労やプロセスを聞く

・行政と地域のそれぞれの立場からの話を聞くことにより、マネジメントの意図(目標の設定・共有化、地域資源の結び付け方、活用方法、担い手づくり、多様な主体との連携など)を浮かび上がらせる。

カリキュラム 地域経営論 – 人材サイクルを検証する –

1日目	2日目	3日目	4日目
トップマネジメント	ミドルマネジメント	地域のマネジメント	マネジメント人材 重層的な展開
<p>地域経済分析と 活性化戦略について しんきん南信州地域研究所</p> <p>地域経営論 人材サイクルの構築に向けた 地域経営の考え方 飯田市長 牧野 光朗</p> <p>農家民泊 農家との交流</p>	<p>事例別講義 ○人づくり 「公民館をベースにした人づくり」 ○地域づくり 「『山・里・まち』特色を活かした 地域づくり～市街地再開発～」 ○産業づくり 「地域資源の付加価値化と 都市と農村交流」</p> <p>地域経営論 立命館大学 平岡 和久 教授</p> <p>グループ別ミーティング</p> <p>事例調査 川本喜八郎人形劇美術館</p>	<p>フィールド調査 ○人づくり ①地育力による人づくり 公民館と地域人教育 ②公民館活動による人づくり 南信濃の地域づくり</p> <p>○地域づくり ③中山間地域の持続可能な 集落経営(上久堅地区) ④市街地再開発からの 丘の賑わいづくり(中心市街地)</p> <p>○産業づくり ⑤都市と農村の交流(ツーリズム) 農家民泊の取組 ⑥市田柿による 産業クラスターづくり</p> <p>グループ別ミーティング 報告会準備</p>	<p>グループ別ミーティング 報告会準備</p> <p>グループ別報告会</p>

共通テキスト

・牧野光朗編著(2015)『円卓の地域主義』事業構想大学院大学出版部

* 共通テキストによる事前学習により、学生は予備知識をもって参加

地域経営の実践 ポイントの提示

- ① **地域アイデンティティの確立** (自分たちの地域はどのような地域か。どのような地域をめざすのか)
- ② **長期的・総合的な構想・計画・戦略** (目的を達成するための総合的な地域資源の活用)
- ③ **地域の各層、組織間の連携、協力意識の醸成と協働** (理念の共有、行政と民間諸組織との連携・役割分担)
- ④ **目標を共有する仲間をつくり、リーダーを育てる**
- ⑤ **ソーシャル・マーケティング** (地域の外部への働きかけとともに地域住民のニーズの把握・サービスなど地域内部の活動を含む。市場の創造や顧客および地域住民の満足をもたらす活動)
- ⑥ **ネットワークの形成と地域のブランド**

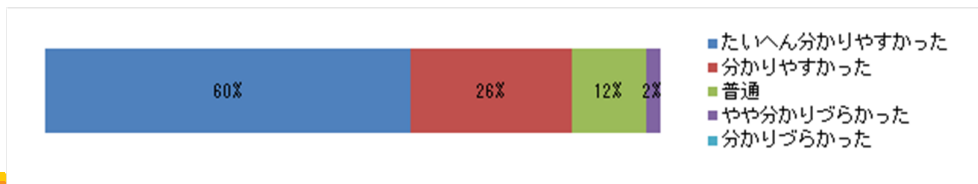
参加学生アンケート：地域経済と活性化戦略 (しんきん南信州地域研究所 林氏)

- ・データが多くて参考になった。
- ・データによる細かい分析の説明が面白かった。
- ・グラフなどを用いて説明されたため、分かりやすかったです。
- ・リニア新幹線について分かり易かった。
- ・共通課題を提示されていたので良かったです。
- ・飯田市のリニアといった外部との繋がりでの今後の方針がわかった。
- ・具体的な数値やグラフがあったのでわかりやすかった。
- ・飯田市でのまちづくりにおける協議について分かった。
- ・配布された資料の図表を見ながら、解説もして下さったので分かりやすかった。
- ・聞きやすく、資料を使った講義が良かった。



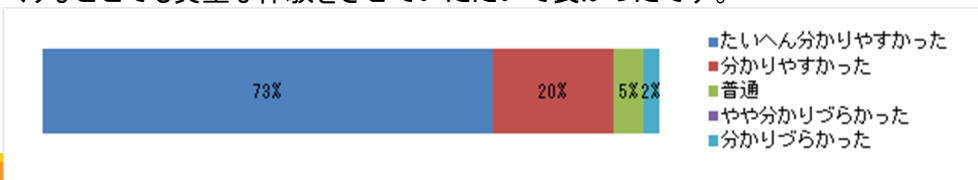
参加学生アンケート 地域経営論(市長講義)

- ・地域経営の難しさを考えさせられた。
- ・1人1人に考えさせるような講義で、分かりやすく、またインパクトがありました。
- ・持続可能な地域づくりが分かり易かった。
- ・ある問題において、解決策を市役所員の立場から考えることでわかりやすかったです。
- ・質問を投げかけられたことで、当事者意識を持って考えることができました。
- ・飯田市の問題に対して市長の考え方を生で聞いて本ではわからないことを理解できた。
- ・話がわかりやすく講義が短く感じた。
- ・「円卓の地域主義」で事前学習をしていたが、直接お話しを聞くことができてよかった。
- ・学生が参加できる講義で良かった。
- ・事前学習でリンゴ並木のことなどを勉強していたのでとても分かりやすかった。



参加学生アンケート 農家民泊(農家との交流)

- ・貴重な経験となった。第2の家だと感じる時間を過ごせた。
- ・笑顔がたえなく、とてもたのしかったです。
- ・若者の不足による今後の農業の担い手への不安について、直々に話を伺うことができた。普段体験できないことで良かった。
- ・飯田型の農家民泊のシステムをみることは良かったが、ただ泊めてもらっただけという感覚でした。物足りないです。
- ・実際に飯田市の話聞くことができ、大切な時間だった。農業の問題についても学ぶことが出来た。
- ・千代地区が農家民泊を行うに至った過程の話をはじめ、様々な話を聞くことができ、大変いい交流となった。
- ・地域の人々の温かさを感じる事ができた。
- ・農家民泊の楽しさを知ることもでき、農業体験の良さを知ることができた。
- ・もう少し農家の方と交流する時間がほしかった。
- ・苔玉づくりなどとても貴重な体験をさせていただいて良かったです。



参加学生アンケート フィールド調査

1班:人づくり①「地育力による人づくり」

・同世代または自分よりも年下の人たちが、あれほど深い考えを持っていることに衝撃を受けた。

2班:人づくり②「公民館活動による人づくり(南信濃地区)」

・自分が“人作り”について考えるきっかけになった。地域経営に関してだけでなく、考え方や想いなどの内面的な話を聞いたのでとても勉強になりました。

3班:地域づくり①「中山間地域の持続可能な集落経営(上久堅地区)」

・様々な農家の産業→商店まで作る人から支える人まで見られ、地域交流ができていると少し感じ取れたので、よかった。

参加学生アンケート フィールド調査

4班:地域づくり②「市街地再開発からの丘の賑わいづくり(中心市街地)」

・飯田まちづくりカンパニー、NPOいいだ応援ネットイデアなど「丘の上」活性化に取り組む団体の最前線をよく知る方々に、現場の実情も詳しくうかがうことが出来た。

5班:産業づくり①「都市と農村の交流 農家民泊の取組」

・人によって農家民泊に対する考えは違うものだなあと感じた。お金もうけのために必ずしもしているわけではないということにはとても驚きました。

6班:産業づくり②「市田柿による産業クラスターづくり」

・産業が地域と密着しており、「市田柿」というブランドは、多くの人の協力で成功してきたのだと感じた。



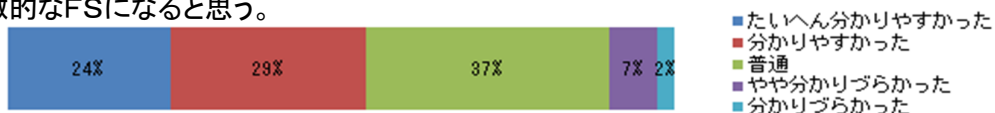
参加学生アンケート 地域経営論フィールドスタディに参加して

- ・実際に現場に出ないとわからないことを多く知れた。
- ・様々な話を聞くことができ、とてもよかったです。自分の地域とはまったく違うことを改めてわかりました。
- ・1つ1つ目標、目的があり、それに向けて住民、委員会が一体となって問題解決をしていることが調べていく内にわかりました。
- ・歳も育った地域も大学も違う仲間と意見を出し合えたこと、とても貴重な体験をすることができた。
- ・実際に現場の方々に直接お会いすることはもちろんのこと、他大学の他学部生と意見を交わすことでお互いに学び合うところがあり、非常に有意義なフィールドスタディだと思う。
- ・様々な観点から飯田を見ることができてよかった。
- ・自分で見て、聞いて、感じることの良さとおもしろさを体感しました。
- ・他大学との交流や飯田のまちづくりを知る良いきっかけになりました。
- ・時間がなくて聞きたいことが聞けなかったのが残念だった。
- ・他大の大学生との交流でよい刺激をもらった。



参加学生アンケート カリキュラムの組み立てについて

- ・どのプログラムもまちづくりに必要な内容で非常に勉強になった。少し日程を詰め込みすぎて疲れました。
- ・フィールドワークの時間、まとめや発表までの時間がもっとあればと思った。(7件)せっかく遠い所から来ているのに、部屋で講義はもったいない。
- ・人作り、地域作り、産作りと、3カテゴリーに分けた枝分かれた2つのパターンで考えることができ、他の視点で考えることができました。これは、参加人数が多かったからこそできたことなので、皆さんの参加に感謝です。
- ・ハードなスケジュールではあったのですが、飯田の人々が何を考えているのか少しの時間で少しでも感じ取れるカリキュラムであったので、良かったと思いました。カリキュラムを今後も続けてほしいです。
- ・時間に追われたりすることもありましたが、基本的には充実した4日間でありました。
- ・飯田を体系的に学べるカリキュラムになってよかった。
- ・発表の準備の時間が少なかったため、勉強することよりも発表することが目的となってしまった。
- ・フィールド調査にもう少し時間を費やすことができればよかった。
- ・農家民泊は、一日目より、フィールドスタディ後半に行うのが良いと思った。講義1日はつらすぎるし、グループワークは後半しかなくて時間に余裕がない、毎日講義とグループワークの配分をもっと考えてほしい。メリハリのある刺激的なFSになると思う。



地域経営論フィールドスタディの成果

- ・飯田の地域づくりを包括的に理解する枠組みによって、学生の総合的理解につながった
- ・地域経済の実態をデータにもとづき、しんきん南信州地域研究所からわかりやすく話していただいた
- ・地域経営の構想を市長が打ち出し、それを具体的に戦略的に進める部長クラスの講義があり、部長が何を考え、施策を進めてきたかが見える講義であった
- ・フィールドワークの綿密な計画が学生の満足度の高さにつながった。6班それぞれに、『円卓の地域主義』に書かれていない、地域の新しい動きが出ているダイナミズムを感じたのではないか
- ・部長クラスが分野ごとのマネジメントをし、地域では分野別の組織があり、どこまで意識してマネジメントをしているかはともかく、現実的な活動と組織運営を行っており、そこが飯田の強みになっていることが明らかになった
- ・住民への聞き取りでは、本音のところでは行政への批判もあり、それらを含めて学生は聞いているので、多角的な理解につながった。一方的な批判ではなく、住民と行政がぶつかり合って作り上げていくことがわかったのではないか

本フィールドスタディの課題・改善点

- ・地域経営論の理論的枠組みを事前に示した方がよかったのではないか。
- ・地域経営論の講義で実践のポイントを示したが、実例がかなり多様であり、どう解釈するかが難しいところがあった
- ・活動を背後で支えている人たち(黒子)の役割や仕組みが重要であるが、学生は華やかな活動の方に目がいきがちで、それらへの気づきが少なかったのではないか
- ・グループの顔合わせを早い時期におこない大学の枠を外しておく、後々の議論で意見が出やすくなるのではないか

地域と大学との連携における 共通カリキュラムの位置づけ・再考

・中塚・内平(2014)によれば、大学と地域の連携活動には4つのタイプがある

- ①**交流型**:住民とともに地域づくりをおこなう活動タイプ
- ②**価値発見型**:グループ単位での活動を計画的におこない、地域の新しい価値発見をめざす
- ③**課題解決実践型**:地域の抱える課題に対して、具体的な実践活動をとおして解決
- ④**知識共有型**:教員や院生などが専門知識をもって地域課題の解決に貢献

・共通カリキュラムPJは、「**価値発見型**」に徹底してこだわる。

各大学による飯田での個々の価値発見だけでなく、総合的・包括的に飯田の価値を把握・「見える化」するねらい

* 中塚雅也・内平隆之(2014)『大学・大学生と農山村再生』筑波書房

共通カリキュラムPJのまとめと今後の 方向性について

・導入科目、展開科目の実践をとおして、共通科目らしきものはできてきた。プロジェクトとしては、次年度に「地域文化論」を実施し、区切りをつけたい

・プロジェクトから通常の実践へ

・多くの大学が参加し、共通して学び合える共通カリキュラムの安定的実施をめざす

・そのためには、教材のテキスト化、データベース化が必要

講義資料・動画、各大学の研究成果や論文等をアーカイブ化

理想とすれば、展開科目ごとに本を出す